

新堂遺跡



2006年3月

大阪府教育委員会

序 文

羽曳野丘陵の北端に位置する松原市には、河内大塚山古墳をはじめとする多くの遺跡があります。新堂遺跡もそのひとつであり、『古事記』、『日本書紀』に記された「丹比柴籬宮」推定地の一角を占めていることと知られています。

今回報告する調査は、下水管渠築造工事に先だって実施したものです。確認調査では鉄型や竈を思わせる特異な土製品が出土し、この結果を受けて実施した発掘調査では流路を検出いたしました。小規模な調査ではありますが、地域の歴史を解き明かしていく上で重要な資料になるものと考えております。

調査にあたりましては大阪府南部流域下水道事務所、松原市教育委員会をはじめ関係者の方々に多大なご協力を賜りました。深く感謝いたしますとともに、今後とも文化財保護に対し、より一層のご理解、ご協力を賜りますようお願ひいたします。

平成18年3月

大阪府教育委員会
文化財保護課長 丹上 務

例 言

1. 本書は西除川右岸雨水B幹線（第2工区）下水管渠築造工事に伴う、松原市新堂・高見の里・柴垣所在、新堂遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は大阪府土木部下水道課の依頼を受けて、大阪府教育委員会文化財保護課が実施した。
調査番号は確認調査が05015、発掘調査が05031である。
3. 調査に要した経費は大阪府土木部が負担した。
4. 確認調査は文化財保護課調査第二グループ主査藤澤真依を担当者として平成17年6月に実施した。発掘調査は、同グループ技師地村邦夫を担当して同年8月から9月まで実施した。報告書作成に関わる整理作業は調査管理グループ技師林日佐子、藤田道子、西川寿勝が担当し、平成18年3月にすべての作業を終了した。
5. 本書で使用した座標は国土座標第VI系（世界測地系）、方位は座標北である。
6. 本書に掲載した遺物写真的撮影は（有）阿南写真工房に委託した。出土遺物の炭素14年代測定は（株）パレオ・ラボに委託した。
7. 本書の執筆・編集は地村・藤澤がおこなった。
8. この報告書は300部作成した。一部当たりの単価は321円である。

1 はじめに

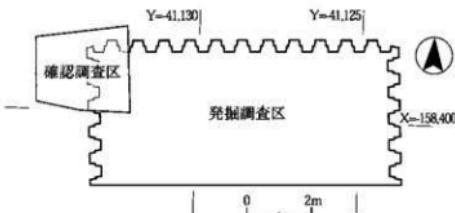
今回の調査は、大阪府南部流域下水道事務所が計画した大和川下流流域下水道西除川右岸雨水B幹線（第2工区）下水管渠築造工事に先だって実施した。調査対象地は松原市新堂一丁目に工事予定の下水道発進立坑である。平成17年6月13日～6月22日に下水道発進立坑の西側隣接地で確認調査を実施したところ、地山層上面で焼土塊がまとまって出土した。調査の結果、これらは単なる焼け土ではなく、なんらかの構造物もしくは土製品が潰れたものであると考えられたため、同年8月19日～9月1日（周辺測量等を含め8月18日～9月9日）に下水道発進立坑内にて発掘調査を実施した。以下、確認調査と本調査の結果を併せて報告する。

2 調査結果

（1）調査の方法

確認調査区の大きさは東西2.8m、南北1.9～2.6m、面積6.6m²である。現地表面より重機で掘削し、遺構・遺物の確認に務めた。

発掘調査区の大きさは東西9.2m、南北4.0mで、面積は36.8m²である。表土および旧耕作土を重機で掘削し、以下を人力で掘削した。また、調査時間が短く、新たに基準点を設置する時間がなかったため、遺構図・平面図は、下水道工事用の独自の座標に基づく基準点を利用して作成した。調査終了後に松原市天美南五丁目で調査中の堀遺跡に設置されていた3級基準点からトラバース測量をおこない、本遺跡の工事用トラバース網に連結することで、十分な精度は望めないものの国土座標を算出している（第1図）。



第1図 調査区位置図(S=1/150)

（2）基本層序

発掘調査区西側壁で観察した土層断面を基本層序として報告する。

調査地点の土層は①盛土・旧耕作土、②灰黄褐色粘質土、③灰黄色粘質土、④黄灰色砂混粘土、⑤黄灰色土の五層に大別することができる（第2図）。

①盛土・旧耕作土

盛土・旧耕作土は5層に細分した。第1層は近年の造成に伴う盛土であり、層厚は約0.3mである。第2層は褐灰色（10YR4/1）微砂であり、層厚は約0.4mである。第3層はオリーブ褐色

(2.5Y4/6) 細砂で、層厚は0.06mである。第2、3層とも近現代の盛土であろう。第4層は灰オーリープ色(7.5Y5/3)粘性砂質土で、層厚は0.03~0.05m、第5層は灰色(7.5Y4/1)粘土で、層厚は0.06mである。第4、5層は近世以降の耕作土および床土と考えられる。

②灰黄褐色粘質土

第6層は灰黄褐色(10YR5/2)粘質土で、層厚は0.15~0.2mである。本層上面を第1面とした。本層は発掘調査区のみ堆積しており、確認調査区では認められなかった。

③灰黄色粘質土

灰黄色粘質土は第7~10層の4層に細分した。第7層は暗オーリープ色(5Y4/4)粘性砂質土で、層厚は0.1~0.18mである。本層上面を第2面とした。第8層は暗灰黄色(2.5Y5/2)粘性砂質土で、層厚は0.15~0.22mである。第9層は灰オーリープ色(5Y5/3)粘質土で、層厚は0.1~0.15mである。第10層は黄灰色(2.5YR6/1)粘質土で、層厚は0.04~0.1mである。第7~10層の色調は鉄分・マンガンの沈着により上層ほど赤みが強く、土質は下層ほど粘性が強い。しかしその変化はいずれも漸次的で明確に線引きできるものではなかった。現場ではあえて分層し、各層上面で遺構の有無を確認したが、本来は全体を一層としてとらえてよいと思われる。

④黄灰色砂混粘土

第11層は黄灰色(2.5YR5/1)砂混粘土で、層厚は0.05~0.1mである。発掘調査区内では西ほど厚く堆積し、確認調査区では0.15m前後あった。本層上面を第3面とした。

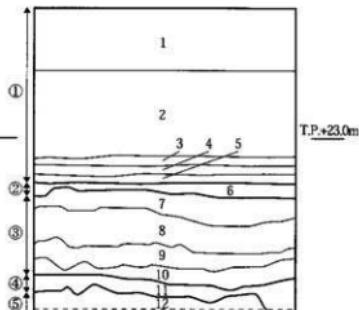
⑤黄褐色粘土

第12層は黄褐色(10YR5/6)粘土で、層厚は0.1m以上ある。本層上面を第4面とした。

(3) 確認調査の結果

確認調査区では遺構は検出されなかったが、第5層および第7層から少量の土器、剥片が出土し、地山面(第12層上面、発掘調査区の第4面)直上からは先述の通り、なんらかの構造物もしくは土製品と考えられる焼土塊が出土した(第3図、写真1、2、5)。

第5層から出土した遺物は土器片とサヌカイト剥片1点である。土器片は小片のため時期は不明である。また本層は近世以降の旧耕作土・床土と考えられることから、サヌカイト剥片は混入したものと判断される。第7層から出土した遺物は弥生土器の小片2点である。ともに中期の土器片である。このうち1点には縫状文が施され、第IV様式の古い段階に位置付けられる。この土器片が地山面上で出土した焼土塊の時期を推測する根拠となった。



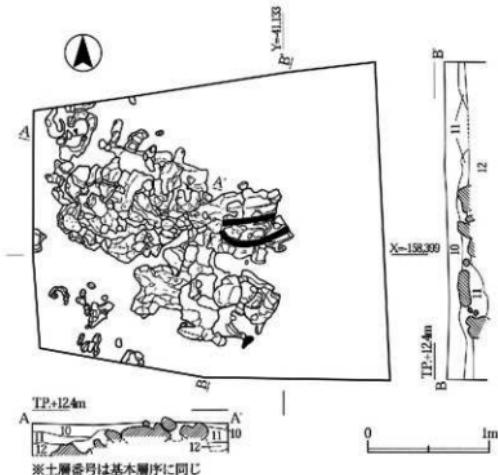
第2図 土層断面図(S=1/30)

焼土塊は第8層掘削中にT.P.+22.4m前後から検出され始めたが、大きく広がることが明らかになったのは第11層の上面付近、T.P.+22.1m前後からである。地山面まで掘削した結果、焼土塊は確認調査区の中央や東よりに長さ2.2m、幅1.5m程度の範囲にまとまっていることが判明した。周囲にも若干破片が散らばっているが、ほぼこの位置で潰れたことを思わせる状況である。本来の形状は不明だが、確認調査区の地山面のレベルはT.P.+22.0m前後なので、最も高い部分は潰れた状態でも約0.4mほどの高さがあった。また径10cmほどの穴があいた部位、木芯を入れて形成している部位など特異な構造が認められた。

その性格については、焼土塊の下面が、深い部分で約0.2m程地山面に入りこんでいて、この場に設置されていた可能性が高い

こと、周囲の地山面に受火によると思われる変色が認められ、地山面上面付近と第11層には炭片が多数含まれていたことから、鋳型や竈、炉など火熱を受けるものではないかと想像された。時期は供伴遺物がないため不明である。ただ第7層から弥生時代中期の土器片が出土しているので、焼土塊の時期はそれを遡る可能性が考えられた。

以上の結果から、下水発進立坑内の発掘調査を実施することとした。



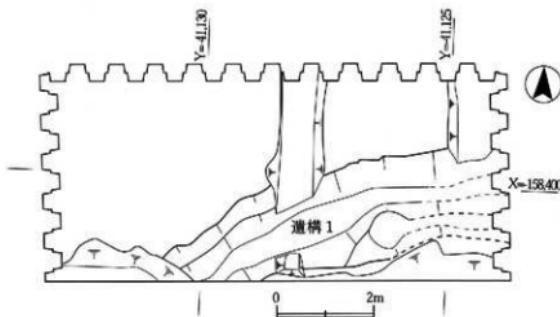
第3図 確認調査区 焼土塊出土状況(S=1/40)

(4) 発掘調査の結果

発掘調査では4面を調査したが、構造、遺物は第1、2面から検出したにとどまった。

第1面（第4図、図版3）

第1面の標高はT.P.+22.6～22.75mである。本面は中央部と東端部に



第4図 発掘調査区 第1面平面図(S=1/100)

攪乱が入っていたが、流路 2 条を検出した。

遺構 1 東西方向の流路である。規模は幅2.1m、深さ0.3~0.5mである。埋土下層から土師器壺の口縁部片と甕、壺の底部片が出土した（写真 6）。時期はいずれも古墳時代前期である。

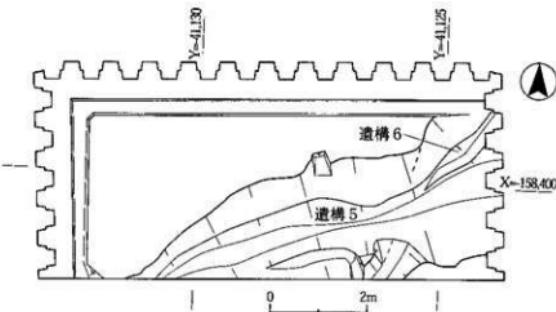
遺構 6 北東 - 南西方向の流路である。本遺構は第 1 面もしくはさらに上層の遺構であるが、調査は第 2 面でおこなった。これは本遺構を検出した調査区東端部が、第 2 面のレベル附近まで大きく攪乱を受けていた上、攪乱埋土の影響で土色も変色していたため、本遺構が掘りこまれた面が確認できなかったからである。平面を第 2 面まで下げた結果、調査区外の土層に本遺構の断面が一部確認され、第 1 面より上層から掘りこまれた新しい溝であることが判明した。規模は不明だが、第 1 面からの深さは約1.1mである。攪乱付近から古代以降のものと思われる土師器片が出土しているが、本遺構に確実に伴う遺物はなかった。

第 2 面（第 5 図、写真 4）

第 2 面のレベルはT.P.+22.5~22.7mである。流路 1 条を検出した。

遺構 5 東西方向の流路であり、第 1 面遺構 1 の前身であると考えられる。規模は幅2.8m以上、深さ0.85mである。埋土最

下層から土器片 2 点が出
土した。いずれも弥生土
器の小片と見られる。う
ち 1 点にはタタキの痕跡
があることから、後期の
甕である可能性が高い。
他に遺構の肩部からサヌ
カイト製スクレイバーが、
遺構中層の壁面からサヌ
カイト剥片が各 1 点出土
した（写真 7、8）。



第 5 図 発掘調査区 第 2 面平面図(S=1/100)

第 3 面

第 3 面のレベルはT.P.+22.1~22.25mである。本面では遺構・遺物は検出されなかった。

第 4 面

第 4 面のレベルはT.P.+21.9~22.1mである。確認調査では多数の焼土塊が出土したが、本調査区内では遺構・遺物は検出されなかった。



写真1 確認調査区 焼土塊出土状況（西から）



写真2 確認調査区 焼土塊出土状況（東から）



写真3 発掘調査区 第1面（東から）



写真4 発掘調査区 第1面（東から）



写真5 確認調査区 焼土塊（一部）

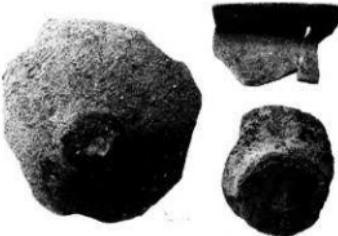


写真6 発掘調査区 第1面遺構1出土土器



写真7 発掘調査区 第2面遺構5出土剥片



写真8 発掘調査区 第2面遺構5出土石器

3 まとめ

今回の新堂遺跡における調査は、確認調査、発掘調査を合わせ面積43m²、期間は三週間ほどの小規模なものであったが、本遺跡についていくつかの知見を得ることができた。

確認調査では地山面上（第12層上面）で火熱を受ける性格の構造物もしくは土製品と推測される焼土塊が出土した。上層の第7層から弥生時代中期の土器片が出土しており、これを巡る可能性が考えられた。この結果を受けて実施した発掘調査では4面を調査した。第1面（第6層上面）は古墳時代前期、第2面（第7層上面）は弥生時代後期と考えられる。第3面（第11層上面）では遺構、遺物とも検出されなかった。第4面（第12層上面）では焼土塊の性格、時期を考える新たな手がかりが期待されたが、第3面同様、遺構、遺物は検出されなかった。ただ確認調査の第7層出土土器と発掘調査の第1、2面遺構出土土器の時期、層序に矛盾はないことを確認することはできた。なお調査終了後に、焼土塊に含まれた炭片2点について炭素年代測定をおこない、BP2774±23、BP2868±23年との結果を得た。調査の所見とも整合していることから、焼土塊の時期は縄文時代晩期と考えてよいと思われる。①火熱を受ける性格のものであると推測されることと、②この地点に設置されていた可能性が高いこと、③縄文時代晩期に位置づけられることなどを考え合わせると、この焼土塊は何らかの上部構造をもつ特殊な屋外炉ではないかと推測しておきたい。周辺地域における今後の調査が待たれる。

なお調査には、松原市教育委員会のご指導・ご教示をいただいた他、庵ノ前智博、鷺塚麻友子、久米廣陵、清水奈都紀、進藤智美、関本優美子、西村雅美、西村 恵子、松尾照子の協力を得た。記して感謝いたします。

ふりがな	しんどういせき					
書名	新堂遺跡					
副書名						
巻次						
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告					
シリーズ番号	2005-6					
編著者名	地村邦夫、藤澤真佑					
編集機関	大阪府教育委員会					
所在地	〒540-8571 大阪市中央区大手前二丁目 TEL06(6941)0351					
発行年月日	2006年3月31日					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 東經	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
しんどういせき 新堂遺跡	おおさかぬまゆらし 大阪府松原市 しんどう 新堂	27217	32 34° 16"	135° 33° 06" ～ 2006年3月31日	43	西側川右岸雨水 B斜面建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
新堂遺跡	集落跡	古墳時代 弥生時代	後路	土師器、赤陶土器 サヌカイト製石器	確認調査では特異な土製品が出土	

大阪府埋蔵文化財調査報告2005-6
新堂遺跡
発行 大阪府教育委員会
〒540-8571 大阪市中央区大手前二丁目 TEL06(6941)0351
発行日 2006年3月31日
印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所 大阪市東成区深江2-6-8 TEL06(6976)8761